宮城県文化財調査報告書第十二集

埋蔵文化財緊急発掘調査報告書

宮城県教育委員会

はじめに

最近開発事業の進展にともなつて、土木工事等により、貴重な遺跡が不用意のうちに破壊されることがすくなくありません。現状のまゝで保存することが一番望ましいことでありますが、事業の性格からやむを得ないものについては事前に発掘調査を行ないその記録を残すことに努力いたしてまいりました。

この調査概報は、土木事業等に先立ち、緊急発掘調査を実施したものを集録したもので、郷土史を究明するうえ又は学会の資料として活用願えれば幸いであります。

最後に調査にのため、ご多忙のところ従事していたゞいた発掘担当者並びに調査協力者各位、宮城県文化財専門委員伊東信雄氏のご協力に対し深く感謝の意を表します。

昭和四十二年三月

宮城県教育委員会教育長　二瓶　保

目次

Ⅰ　桝形横穴古調査概報・・・

Ⅰ　桝形横穴古墳群

一、所　在　地　　宮城県宮城郡七ヶ浜町湊字桝形七、八、一三、二一、二三、二六番地

二、調　査　期　日　　自昭和三十八年六月二十一日
　　至　〃　　六月三十　日

三、調　査　者　　宮　城　県　教　育　委　員　会

四、調　査　担　当　者　　日本考古学協会員　　加　藤　　孝
　　〃　　氏　家　和　典
　　〃　　後　藤　勝　彦
　　〃　　林　　謙　作

五、調　査　協　力　者　　宮城県名取高等学校教諭　　佐　藤　宏　一
　　東北大学教授　　高　橋　富　雄
　　聖和学園吉田高等学校教諭　　鍜　治　一　郎
　　東北大学文学部考古学研究室

六、調　査　概　要

弥生遺跡で著名な桝形囲貝塚周辺一帯の小丘陵傾斜面上には多数の横穴古墳が群在している。これらは正式に調査が行われたわけでもなく、古くから開口して戦時中は防空壕に改造されたり、また現在では民家の貯蔵庫に利用されたりして、加えて長年月の自然風化で著るしく変貌し、かつての面影を復原することが至難なほどにその学術的価値を喪失している。

このような現況下において、昭和三十八年春からこの地域の一部、七ケ浜町湊字桝形七・八・十三・二一・二二・二六番地内に多賀城土建会社による土砂取工事が開始されたが、工事の進展とともに未開口の横穴四基が新しく発見され注目をひくに至つた。連絡をうけて現場に急行し現地踏査を実施したわれわれは、四基の他に未開口の横穴古墳の遺存するのを確認し、この際破壊前に発掘調査を実施する必要性を痛感したのであつた。

幸いに地主大町輝氏や多賀城土建会社の御厚意により調査期間中作業停止という全面協力が確約されたので、宮城県教育委員会が主体となり、七ヶ浜町の応援を求め、緊急発掘調査を企画することとしたのである。

発掘並びに実測調査は六月二十一日より六月末にかけて実施した。調査した横穴古墳は工事により発見したもの四基を加えて十一基に達し、出土遺物としては、土師器四点、水晶製切子玉一点、メノウ製勾玉四点などであつたが、この種類の簡略な横穴古墳の性格をとらえる点に若いて学術的に貴重な成果をあげることができた。今こゝにその成果を報告することによつて調査担当者一同の義務を果しておきたい。

一、各横穴の状況

土砂取工事中に発見されたものをA地区とし、正式調査実施の結果発見したものをB地区とした。A地区にあつては北から南へ、B地区にあつては発見順に番号を付した。

「A地区」

1号墳　本横穴古墳群にあつてはすべて玄室内に棺座の設備をもたない。1号墳玄室の平面形は略方形、立面形態はドーム形に近いが奥壁と天井部の境界が角をなしている。玄室内からは何らの人工遺物も発見されなかつたが、人骨片が粉末状態になつて散布していた。玄内部は、羨道立面形態がアーチ型であるのに対してその立面形態は台形状の長四角を呈し、床面上には羨道部との境界に段落が認められるので、こゝでもともと閉塞されるべき性格のものであつたことが察せられる。しかも調査の際には、この玄門部前端から羨道部床面にかけて開塞用の支え石が三重程度に積み重ねられて遺存していたのである。興味深い現象は、この積石最外側の河原石の内側から積石間にはさまつて、土師器丸底坏が発見されたことである。いかなる意味をもつものかはもとより推定の域をでないが、少くとも積石の上部に置かれた坏が落ちて積石の間にはさまつたと考えるのは、積石の性格からみて妥当な解釈とは云えないので、追葬時における閉塞の際、以前の副葬品が意図的に積石中に埋められたと考えるべきであろう。したがつて本来の積石による閉塞は、本横穴の羨道状況から云つて、この玄門部ではなく、羨門部に行なわれた処置が羨道天井部の落盤によつて変更されて玄門部と重なつたものかもしれない。羨道部は、天井部分が現状より更に前にのびていたことを推定できるが、発見の連絡をうけた時には羨道部が積石の近くまですでに破壊されていたので、本来どの程度の長さであつたかを推定する痕跡は全く見出せなかつた。床面上には玄門前端外から外方に向つて縦貫する排水溝が施こされている。

２号墳　玄室平面形はやゝ前後に長く、床面には、十字型に排水溝を配している。唯縦貫する中央の溝は奥壁には達していない。入口から玄室内にかけてかなりの土砂が流入していたが、遺物は左側壁に近く、溝部よりやゝ奥側床面上から、水晶製切子玉が一点発見された。人骨はすでに溶解していたが、粉末状に近い状態で遺存している部分もあつた。玄室の立面形態はアーチ型である。玄門部の立面形態は両壁がやゝ弧形を描くのに対して天井部は平らで、側壁との境界がやゝ角気味である。玄門前端外床面には閉塞のための溝痕が認められる。羨道部は立面形態アーチ型、１号墳同様にどの程度の長さを有するものかは不明である。唯、玄門部前端に支え石は発見されなかつた。

３号墳　１・２号墳に対してやゝ低目に位置している。玄室の平面形はやゝ方形に近い。かなりの土砂が流入していたが、人骨が散乱状態で部分的に認められた。われわれの調査の際にはすでに攪乱された痕跡が認められたが、追葬に当つて積重ねられていつたものではないかと思われるふしがあつた。玄室の立面形態はすでに玄室前部天井が破壊されたあとであつたため、ドーム型かアーチ型に近いものかさえ不明である。玄門部は玄室のやゝ右寄りに設けられている。玄門部前端外床面には段落がみられ、羨道部床面には右側壁に河原石一個が遺存していたので、こゝで閉塞されたことが明白である。しかし、これが羨道部を形成するのか前庭部を形成するものであるのかは全く不明である。

４号墳　玄室平面形は略方形を呈する。これまた五〇～六〇糎程の土砂が堆積していた。人骨片も堆積土上面に部分的に認められたが、われわれの調査以前にすでに攪乱の痕跡があつた。床面上からは、メノウ製の勾玉四点が発見された。立面形態はすでに玄室前部が破壊されていたので不明であるが、ドーム型とみるより前壁で角をなし変形ドーム型の形態と推定できる。玄門部と羨道部(前庭部？)の境界には床面上に何ら識別しうるものを残していない。最初からなかつたものか長年の風化によつて崩壊したものかは不明である。しかし玄門前端から羨道部にかけて支え石が発見されているので、こゝで閉塞されたことに誤りはない。支え石中、中央部が欠けているのはもとからではなく、工事中止以後の見学者による人為的な破壊である。

「B地区」

１号墳　二段状に並ぶB地区横穴群の上段部に位置している。この一号墳はわれわれの調査以前にすでに開口していたものと思われるが、入口附近は蔦・雑草類によつて覆われていた。内部には床面がかなりの傾斜を示すところから流入土の堆積は殆んどなかつた。平面形は略方形を呈し、各壁は外方にやゝ張り気味である。左奥壁は破壊されて隣接する2号墳と通じていた。玄室立面形態はドーム型に近いが、前壁と天井部がやゝ角をなしている。玄門部立面形態はアーチ型に近いが、壁面の粗雑さとともに規則性あるものとは思えない。玄門前端外床面には

段落がみられるし、左右両隅には柱穴の痕がみられ、とくに左隅は顕著である。対応する天井部にはこれまた柱穴の痕が残つているので、こゝで閉塞されたことは明白である。本横穴は羨道を形成せず遺存する床面は前庭部と推定できる。

2号墳　1号墳の隣に位置し、左側壁が破壊されて1号墳と通じていたが、玄門部は塞がれていた。玄室平面形は略方形、立面形態は天井と後壁並びに前壁との境界が曲線を呈している点からドーム型に近いものとみることができるが、天井部がとくに上方に張りだしていないのでアーチ型の様相をも示している。しかし一応変形ドームの形態としておきたい。床面の傾斜は1号墳と同じくかなり急である。玄門部はやゝ右に寄つている。玄門部の立面形態は一応アーチ型と思われる。玄門前端外床面には段落は認められなかつたが、玄門外床面上に河原石による支え石の堆積が遺存していた。玄門外は羨道を有せず直ちに前庭部となつている。出土遺物は何ら発見されなかつた。

3号墳　1・2号墳の下に位置する。この3号墳は入口が全く埋没していた。3号墳の下には戦時中に防空壕が掘られていたので、3号墳羨道部前半はそのために破壊されたとみることもできる。玄室平面形は略方形、四壁は外方へ張り気味、立面形は本横穴群にあつてもつとも典型的なドーム型を呈している。玄門部はやゝ右寄りに開いている。玄門立面形態はアーチ型、玄門前端外床面上には玄門閉塞用の溝が施こされているし、また玄門前には切石・河原石の積石が遺存していたので、ここで閉塞されたことは明白である。しかしこの3号墳は立面形態アーチ型の羨道部を有し、前方に移行するにしたがつてその巾を滅じているし、B地区横穴配置図に示されているように玄門部が4・6号墳に対して奥に位置している点から云つても、玄門部の他に羨門部に閉塞設備を備えていたことが推測できる。恐らく羨道天井部落盤のため追葬に当つて羨門の閉塞が玄門部に移つたと考えられる可能性が強い。羨道床面上には一五～二〇糧の位置に薄い黒色土の層が認められたが、積石の左傍、黒土層により上位に糸切手法の土師坏が一点発見された。追葬時のものと考えて差支えないであろう。注①

4号墳　3号墳の隣に位置する。3号墳の下方に掘られた戦時中の防空壕が4号墳の背後に達し、そのため4号墳の玄室の奥半分の床面は破壊されている。しかしその破壊は玄門部には達していない。玄室平面形は長方形で立面形はアーチ型を呈する。玄門部はやゝ右寄りに開き、立面形は規則性あるものとは考えられず、アーチ型とも長四角とも判定し難い。玄門部前端外床面には段落は認められなかつたが、玄門前にには段落は認められなかつたが、玄門前には凝灰山石塊・河原石による積石遺構がみられた。この4号墳の羨道部については果して羨道部であるか或いは前庭部であるかの判定さえ困難であつた。

5号墳　上段の2号墳の隣に位置する。玄室平面形は長方形、立面形態は一応尖頭・アーチ型の類であるが、奥壁は著しく尖頭形をとる。

玄室床面にはかなり腐蝕した頭骨を始めとする人骨片が発見されている。玄門はアーチ型の類かもしれないか、規則性あるものではない。玄門前端外床面には段落はみられないか、玄門前に河原石を主とした積石遺構が発見されているし、玄門外の側壁に「カンヌキ」穴の設備があるので、こゝで閉塞されたこと明白である。恐らくこの5号墳は1・2号墳同様に、玄門前には羨道の設備がなく、そのまゝ前庭部とされているもののようである。前庭側壁は真直にのびずに左へ曲線を描いて崖面に達している。出土遺物は全くないが、前庭部床面に火をたいた痕が検出されている。

6号墳　5号墳の下方、4号墳の隣に位置する。やゝ長方形の平面にアーチ型の立面形の玄室を有する。われわれの調査の際には5号墳同様に腐蝕した人骨が床面上に遺存していた。玄門部はやゝ左寄りに位置している。玄門天井部はかなりもろくて発掘中にも落盤する状態であつて、立面形態は全く不明である。玄門前端床面には段落が認められ、河原石の積石も発見されているので、この地点で閉塞されたこと確実であるが、玄門部前に位置するものが羨道であるか、前庭であるのか、4号墳同様に不明である。この前庭部床面上には凝灰岩粉末の水成堆積層に覆われた状態で丸底の埦一点が発見された。またこの外方、前庭部入口附近の床面上から長頸瓶、長頸壺の体部破片が出土している。

7号墳　上段の1号墳の右隣りに位置する。入口は凝灰岩塊によつて完全に埋没していた。玄室平面形は方形に近いが、奥巾に対して前巾の短かさが目立つ。立面形態はアーチ型の類と考えて差支えないが、天井部が曲線をおびてやゝ上方に張つている。床面上には興味深い現象がみられた。すなわち玄室床面は流入土を除去すると床面上に一〇～一五糎程堆積した木炭を含む黒土層(これは玄門前端で二重になつて入口へ移行する)があり、火葬骨と思われる骨片が粉末状態で玄室中央部から玄門にかけて分布していたのである。しかもこの床面は焼けているが、これは何を意味するか遺憾ながら今後の課題とされねばならない。玄門部の立面形態は一応アーチ型とみられる。玄門前端外床面には段落が施こされているが、凝灰岩塊は幾つか認めえたけれども、とくにその他の閉塞を示す痕跡は確認しえなかつた。この7号墳に羨門部が設定されていたかどうかはこれ又疑問のあるところであるが、入口にみられた凝灰岩が落盤によるものか、意図的なものか全く不明であつた。

遺物は、玄門部前端近くの黒土層上から糸切底の坏が一点発見されたにすぎない。

第一表（単位は糎）

		A 墳区 1	A 墳区 2	A 墳区 3	A 墳区 4	B 地区 1	B 地区 2	B 地区 3	B 地区 4	B 地区 5	B 地区 6	B 地区 7
玄室	奥行	二〇〇	二一五	一六五	一九五	一八〇	一八〇	二四〇	一七五	一七〇	一六〇	一七〇
	巾	二〇五	一九五	一七五	一九五	一七〇	一七五	二三〇	一三〇	九〇	一五〇	一六〇
	高さ	一五〇	一三〇	一一〇	一二〇	一一五	一一五	一七五	一〇五	九〇	一〇〇	一一〇
玄門	奥行	八〇	六五	六〇	四〇	四〇	五〇	八〇	四五	四〇	四五	五〇
	巾	八五	八〇	七五	八五	七五	七〇	七〇	七〇	六〇	八五	七〇
	高さ	一〇〇	一一〇	?	?	九〇	九五	九五	一〇〇	八〇	?	九〇
羨道（前庭）	奥行	?	?	?	?	?	?	?	一五五	一七五?	?	一二〇以上?
	巾	一五五	?	?	一四五	一〇〇	一〇〇	一三〇	九五	一〇五	一三〇	一三〇
	高さ	一五〇	一三五	?	?	一一〇	?	一三五	一一〇	一一〇	?	一二五

三、出土遺物

「土師器」

坏　A地区1号墳の積石中から一点、7号墳玄門部から一点の計三点が出土している。実測図1は丸底坏で外底は箆仕上げのあとが顕著である。器外褐色、器内いわゆる内黒。口縁部と底部の接合部分には器外に軽い段を形成しており、東北土師編年上②栗囲式の範疇に属すべきものであろうが、段の形成は栗囲式のように著るしく国分寺下層式③への過渡的形態を示している。丸山横穴④8号墳、善応寺横穴⑤13号墳、追戸横穴⑥6・8号墳出土の坏と同類であろう。奈良時代中期前後のものと推定する。実測図2はいわゆる表杉ノ入②・⑦式の糸切底の土師器で器外褐色、器内は内黒、器内に白色の固形物が一面に付着していた。宮城県第二女子高校教諭桔梗吉弥氏の鑑定を得たが、有機物を少量含む程度で澱粉

や漆喰と推定できるような反応は全くみられなかつた⑧。実測図3は器外褐色、器内は内黒、糸切底という点では実測図2と同様であるが、1・2が焼成堅緻であるのに比し、これは吸水性強くかなりにもろい。底部も若干上げ底風である。2と同じくその時期も平安時代である。

埦　B地区6号墳前庭部床面上より一点(実測図4)が出土している。内外面粗で吸水性強く、褐色を呈しているが、部分的に黒斑がみられる。底部外面は丸底風であるが木葉文を印している。口縁部が著るしく短く対馬式②・⑨に近い感じをもつが国分寺下層式前後のものであろう。奈良時代末頃のものと推定する。

「須恵器」

すべて破片のみでB地区6号墳前庭部周辺から発見された。なかには奈良前代の長頸瓶や奈良時代の長頸壺の⑩破片が6号墳前庭部床面上から発見されている。

「玉　類」

切子玉　A地区2号墳玄室床面上から発見された水晶製のもの一点のみで、長さ二・三糎、最大巾一・四糎、一方から孔をあけたものである。

勾玉　メノウ製勾玉四点がA地区4号墳玄室床面上から発見されている。長さはそれぞれ四糎、三・六糎、三糎、三種であるが、丸山横穴出土のメノウ製のものと同じく実に粗悪品で、いわゆる「コ」字型を呈した末期古墳の時期のものである。

四、考　　察

本横穴群は陸前地方横穴研究上貴重な資料を提供している。

まず第一に編年問題である。B地区横穴群にあつては造成年代の先後関係を確認できるものがある。3号墳の上段に位置している1・2号墳は主軸の方角を異にし、玄室が相接する危険性をおかしてまでそれらの前庭部が、下段の3・4号墳羨道部にかゝらないように配慮されている点を考えると、これは1・2号墳造成年代が3・4号墳より遅れることを証しているものと云えよう。5号墳も4・6号墳の間にその前庭部を位置させないで6号墳の左にでるよう前庭部を曲げてまで設定した点を考えると、6号墳より遅れることはもちろん、2・4号墳より後に造成されたものであるととが明らかであろう。したがつて一般傾向として下段部が古く、上段部が新しいと考えることができるので、7号墳もおそらくは下段部の3・4・6号墳より遅れるものとみて差支えないであろう。いま編年問題を系統づけて考えるため各横穴の形態上の特徴を示す

と第二表のようになる。

第二表

		区地A				区地B						
						段上			段下			
		1	2	3	4	1	2	5	7	3	4	6
立面形態	玄室	変形ドーム	アーチ	変形ドーム	変形ドーム	変形ドーム	変形ドーム	尖頭アーチ	アーチ	ドーム	アーチ	アーチ
	符号	A′	C	A′	A′	A′	A′	C′	C	A	C	C
	玄門	長四角	長四角気味	?	?	アーチ	アーチ	アーチ	アーチ	アーチ	長四角気味	?
	符号	イ	イ′	?	?	ロ	ロ	ロ′	ロ	ロ	イ′	?
	羨道	アーチ	アーチ	?	?	アーチ	アーチ？	四角気味？	アーチ	アーチ	アーチ	?
	符号	ロ	ロ	?	?	ロ	ロ	イ′(ロ)	ロ	ロ	ロ	?

これをB地区上段、下段の関係並びに副葬品状況を加味させて系統づけてみると

A（B3号）・ロ・ロ

A′（A1号）・イ・ロ

C（A2号）・イ・ロ

C（B4号）・イ・ロ

〔C（B6号）・？・？〕

C（B7号）・ロ・ロ

A′（AB31・42号）・ロ・ロ

〔C′（B5号）・ロ′・イ′〕

となるであろう。しかしこの系統図はあくまでも試案の段階であるから、このような視点が果して妥当なものであるか否かの検討は今後に残された課題であろうが、少くとも本横穴群は、陸前地方における無棺座横穴群研究上の一基準を提示しているものといえる。

第二に追葬の問題である。本横穴群のような簡単な構造の横穴も、かなり長期に亘つて使用されたと推定することができる。Ｂ３・７号墳では羨道において少くとも二重に黒土層が遺存しており、追葬が行われたことは明白であり、またＡ３・４号両墳の人骨片は攪乱されたあとではあつたけれども、玄室内の床面直上からではなく玄室内の堆積土中に遺存していたと充分に推定できるし、この種の簡単で小規模な構造の横穴も多葬墓としての性格を所持していたことがうかがわれるのである。副葬品の問題もこのことを裏づけることができる。Ｂ地区にあつて下段部に位置する3号墳と上段部の７号墳からは、同型式(表杉ノ入式)の糸切底の坏が出土しているが、ともに上層の黒土層の時期か、もしくはそれ以後の時期に求められるのであつて造成当初の被葬者に属するものと考えることはできない。これに対して造成年代がＢ３号墳と近いと推定できるＢ６号墳の羨道部床面上からは、水成堆積層に覆われて国分寺下層式の範疇に属すると推定できる埦が出土しているし、さらにその外方の入口床面上周辺から奈良前代と推定できる長頸瓶の破片が出土しているから、この点でＢ３号墳は少くとも奈良前代から奈良時代を通し平安時代中期前後にかけて存続使用されたものであつたことが充分に考えられるであろう。しかしこゝで関連して考えておかなければならないことは遺物の出土量の問題である。本横穴群出土遺物はあまりに微量といえる。これを何と理解するかは本横穴群被葬者の性格を考える上から云つても重要な課題であろう。Ａ４号墳のような粗末な構造の横穴からメノウ製の勾玉四点が発見されているのに、Ａ１号墳やＢ３号墳のような整つた形態の横穴からは玉類が一点も発見されていない。しかしこれは、Ａ４号墳では玉類が玄室床面上から発見されていること、Ｂ６号墳では羨道床面上から須恵長頸瓶の体部破片が発見されていることなどに解決の糸口を求めることができよう。Ｂ３・７号墳は羨道部において少くとも二度は埋葬が行われたことを示しているのに、玄室内においてはこの二重の堆積状況を認めえなかつた。そもそも横穴古墳が家族墓としての多葬制を維持してゆく場合、前葬者達の副葬品の処理の必要性が当然のこととは云え新しい課題として生じたことであろう。Ｂ３・７号墳や、羨道入口床面上から長頸瓶の体部破片が出土したＢ６号墳、また切子玉一点しか検出しえなかつたＡ１号墳などは、追葬に当つて玄室内が整理されたことを物語つているものであろう。これは羨道部についても同じことが云える。Ｂ３・７号墳羨道部に二重の黒土堆積層が遺存するからと云つて、直ちにその層の数が遺葬の度数を意味すると考えることはできない。玄室の整理に伴つて羨道部でもその整理が岩盤の床面上まで行われた場合には、その痕跡が全く消滅するからである。本横穴群から遺物の発見量が少いことについては、さらに火葬制採用の問題とも関連が

あるであろう。火葬制の採用はおそらく副葬品に対する取扱い方にも変化を来たしたものと推定できるからである。したがつて横穴の存続使用が永ければ永い程発見遺物の少くなることは当然と云わねばならないであろう。このように解してゆくと、出土遺物が少いからと云つて直ちにその対象を庶民階級に求めることに危険を感じさせるのである。本横穴群の調査成果は、この点から云つても、今後の無棺座横穴群の研究に貴重な資料を提示したことになるであろう。

五、結　　言

本横穴群の調査成果については

(1) 横穴が階段状に並ぶ場合、その造成年代は下段のものが古く上段のものが新しいと推定できる⑪こと。

(2) 小規模な無棺座横穴群にあつても、追葬の事実が指摘でき、なかにはわれわれがかつて想像もしなかつた程の長期間にわたるものがあること。

(3) 陸前地方における横穴葬制も、後になると火葬制の行なわれるものがあること。

(4) 遺物の出土量が少いからと云つて直ちに庶民階級の墳墓と想定することはできないこと。

(5) 本横穴群としての開始年代は奈良時代直前頃に求められその終末は一応平安時代中期前後頃と想定できること。

などに要約できるであろう。

陸前地方における横穴古墳の研究は、未だ緒についたばかりで、まだまだ数多くの問題点を包含している。本横穴群の如きも、整然たる棺座を有する横穴群といかなる関係にあるのか。とくに本遺跡は現在の海岸線より一粁余しか離れていないので、当時はかなり近くまで汀線が迫っていたことを想像できるが、一体本遺跡の被葬者達はどこに生活の根拠を有していたものであろうか。またその主たる生業は果して何であつたのか。などの点については全く未解決である。将来の課題としておきたい。

最後に末筆ながら、この貴重な調査の機会を考えられ、また御支援下さつた宮城県文化財専門委員の伊東信雄博士、宮城県教育委員会、七ヶ浜町、多賀城土建会社各位、種々と便宜をおはかり下さつた地主の大町輝氏、遺物の面倒を化学分折を心よく承諾下さつた宮城県第二女子高等学校教諭桔梗吉弥氏には厚く謝意を表し擱筆する次第である。(昭和四一年一月三一日　文責氏家和典)

註

① ３号墳の前方あたりからかつて須恵器の長頸瓶一点が出土し大町輝氏によって保管されていた。大町氏から寄託をうけ現在東北大学教育学部考古学資料館で加藤孝が保管している。奈良時代以前に属し、奈良時代に近い頃のものであろう。恐らく３号墳の初葬者に属するものと推定することができよう。

② 氏家和典「東北土師器の型式分類とその編年」（歴史１４輯）

③ 陸奥国分寺跡発掘調査委員会編「陸奥国分寺跡」九一頁～九七頁

② 鍛治一郎・氏家和典・佐藤宏一「宮城県岩沼町丸山横穴古墳群」（東北考古学３）

⑤ 加藤孝・小野力・氏家和典「仙台市燕沢善応寺横穴群」（考古学雑誌４８の１）

⑥ 氏家和典・加藤孝「トンボ玉発見の宮城県涌谷町追戸横穴群」（日本考古学協会第２９回総会研究発表要旨）（昭三十八年四月）

⑦ 加藤孝「塩釜市表杉ノ入貝塚の研究」（宮城学院女子大学研究論文集５）

⑧ ㋑ 試料＋濃硫酸→あたためる→表面黒変、液も少々黒くなる。ただし固形分の形崩れず。同上溶液の炎色反応Ｎａ⊕。（有機物を少量含む）

㋺ 試料＋濃塩酸　反応なし。

㋩ 試料＋濃塩酸＋濃硝酸　反応なし。

㋥ 試料＋２Ｎ塩酸　反応なし。同上溶液の炎色反応⊖（漆喰ではない）

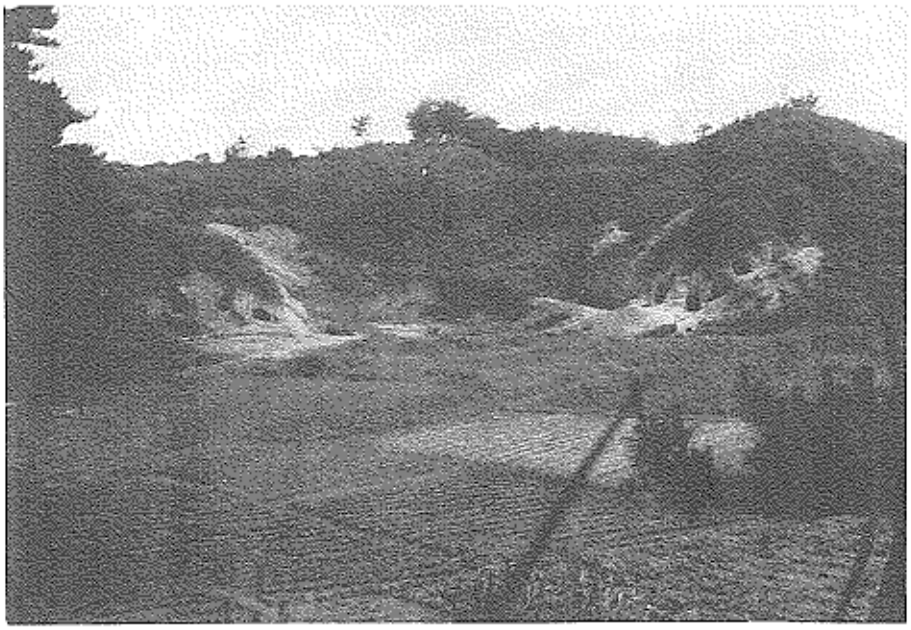
㋭ 試料＋水　６０度Ｃで約２時間浸出　フェーリングとの反応なし。I_2溶液との反応なし。（澱粉や転化糖みられず）

㋬ 試料＋６・７Ｎ塩酸　１００度Ｃで約１時間熱す　弱アルカリ性でフェーリングとの反応なし。炎色反応Ｎａ⊕⊖（糖類なし）

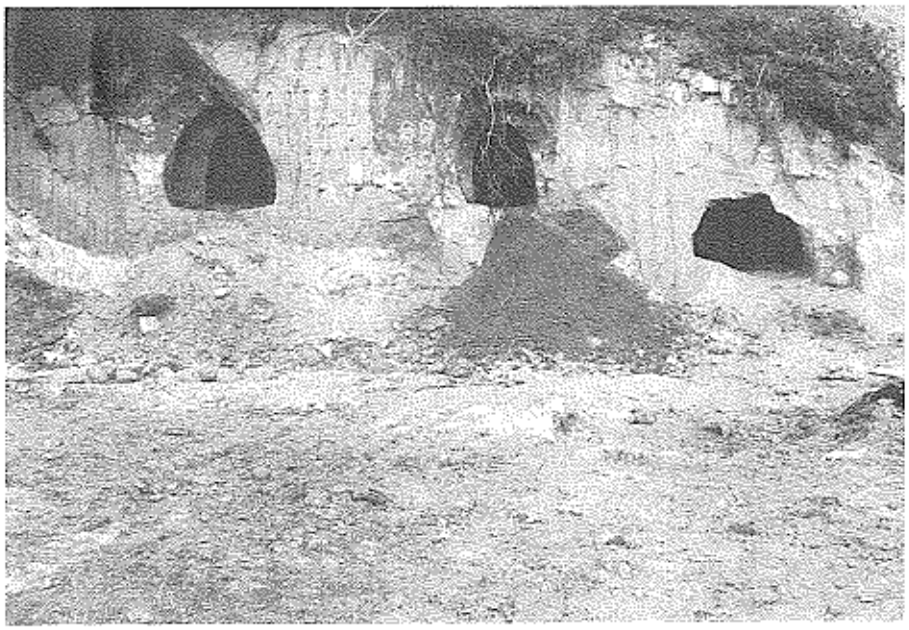
⑨ 加藤孝・伊藤玄三「宮城県登米郡新田村字対馬堅穴住居址群」（新田村史）

⑩ 氏家和典「辺境における横穴古墳群の諸問題―陸前の場合―」（日本考古学の諸問題）では桝形横穴群についてふれているが、こゝでは長頸瓶出土例をとりあげていない。この遺物が最近までまぎれて検討の機会がなかったことにもとづく誤りである。訂正しておきたい。

⑪ 福島県相馬郡鹿島町の大窪横穴古墳群（「福島県東部地区遺跡発掘調査報告書」福島県文化財調査報告書第１０集）では逆に上段のものが古く下段のものが新しいというような見解が述べられているが、桝形横穴群の事例はこの大窪横穴群の場合にも適用できるのではないだろうか。再検討を願いたい。

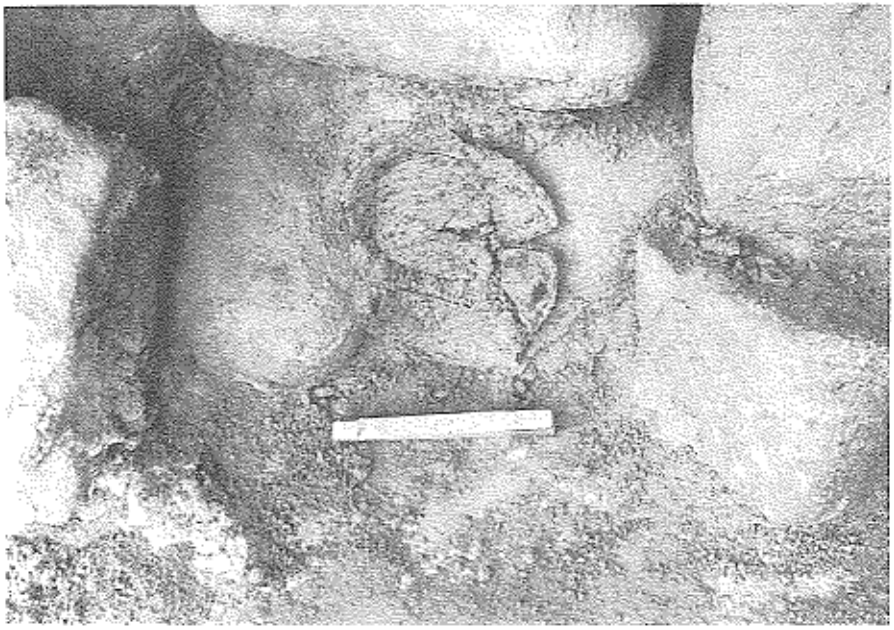


図版第 1.　遺　跡　全　景



図版第 2.　A地区の状況左から１・２・３号墳

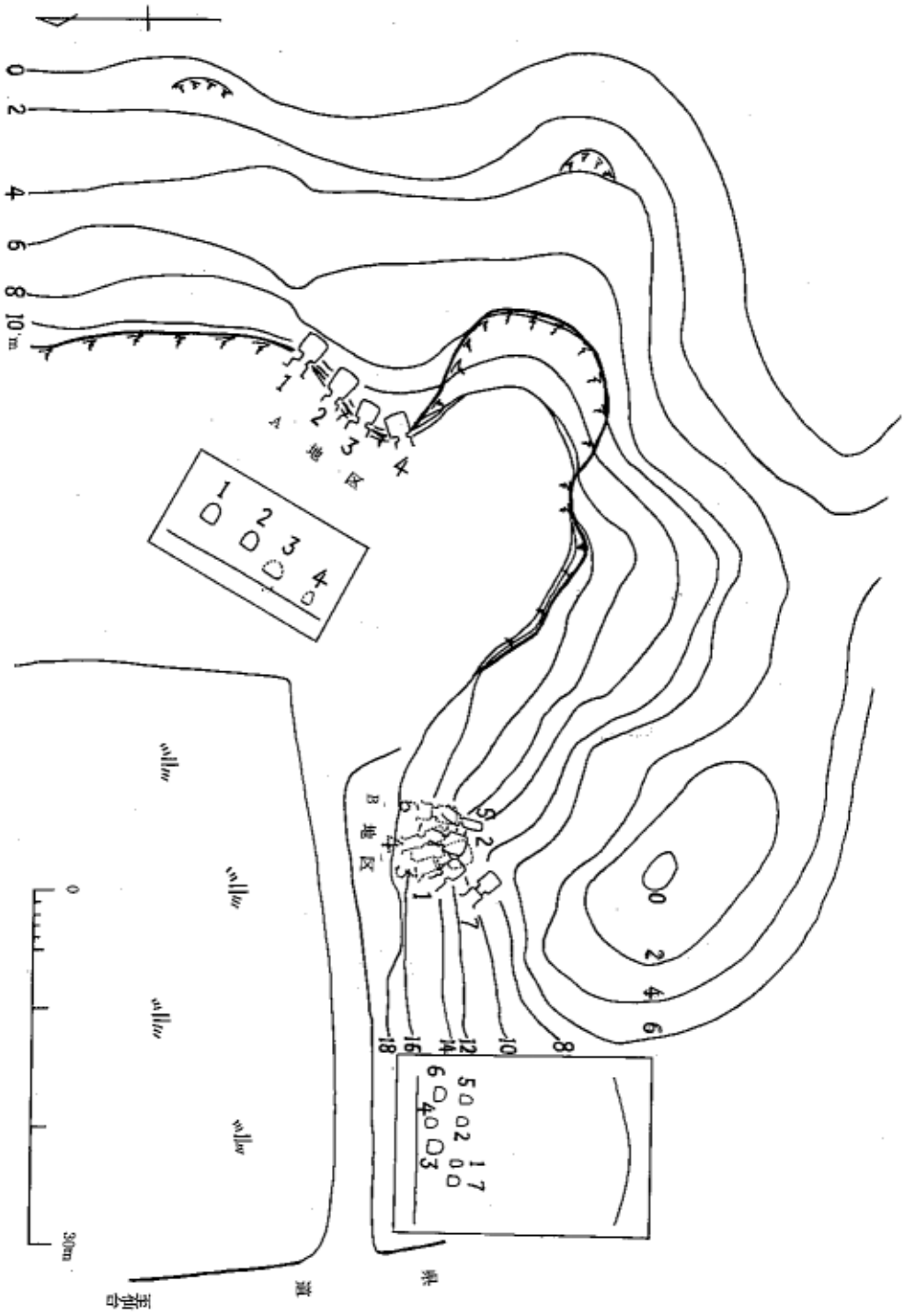
図版第 3.　A 地区 1 号墳積石状況



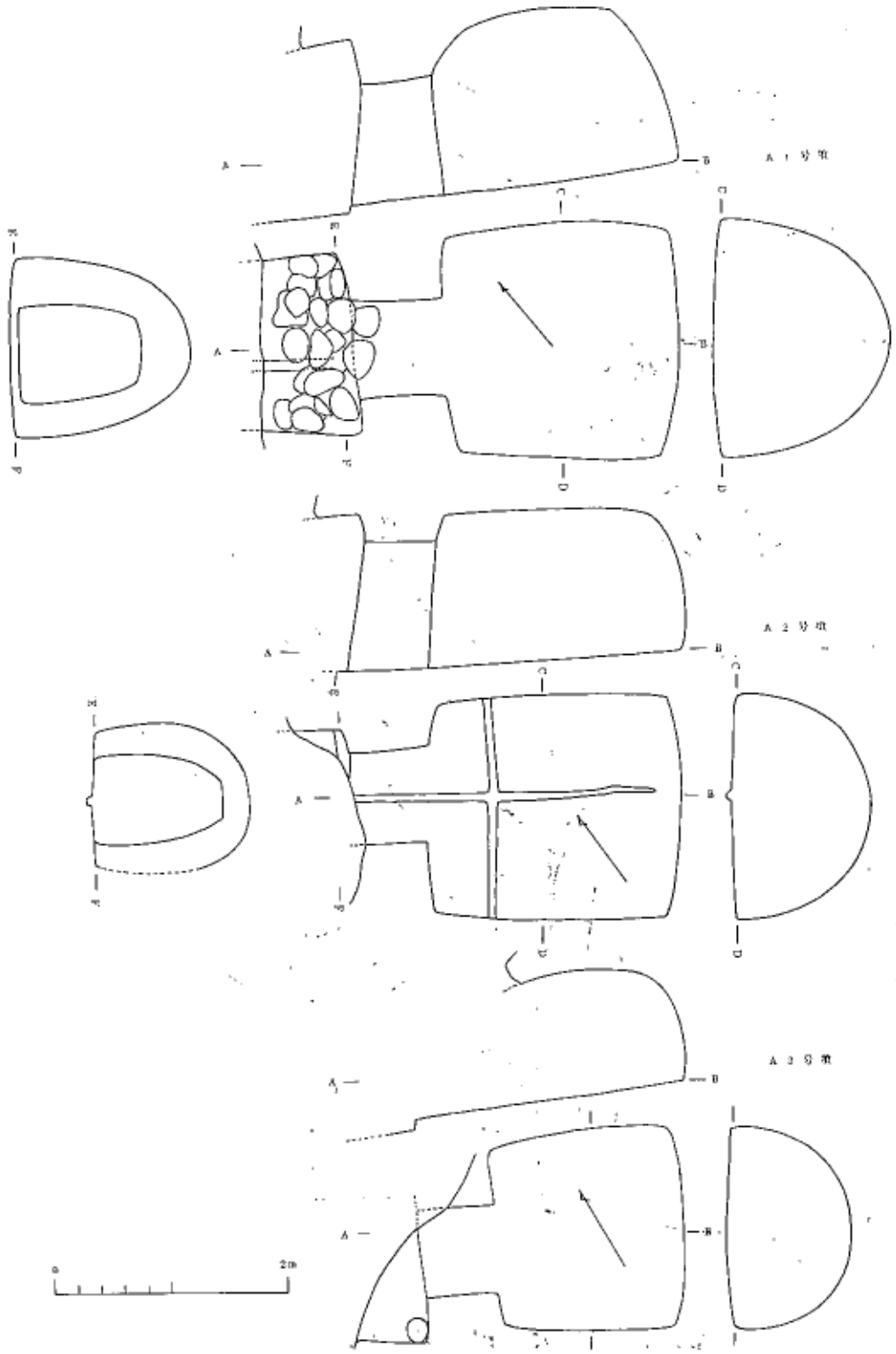
図版第 4.　A 地区 1 号墳土師器出土状況

図版第 5.　B 地区 3 号墳玄門積石状況（左隅は土師杯）

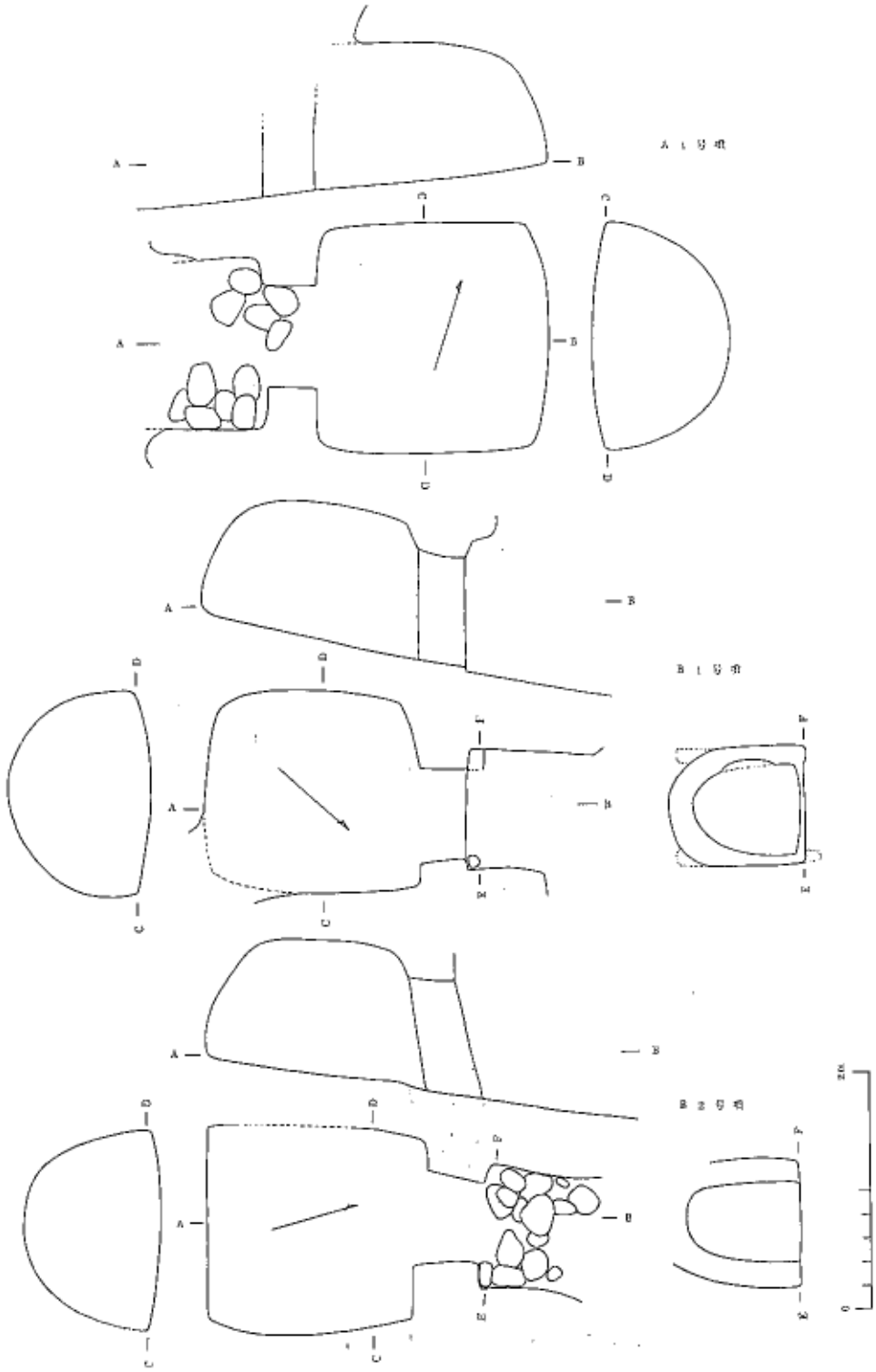
図版第 6.　A 地区出土玉類（左 4 点は 4 号墳，右 1 点は 2 号墳出土）



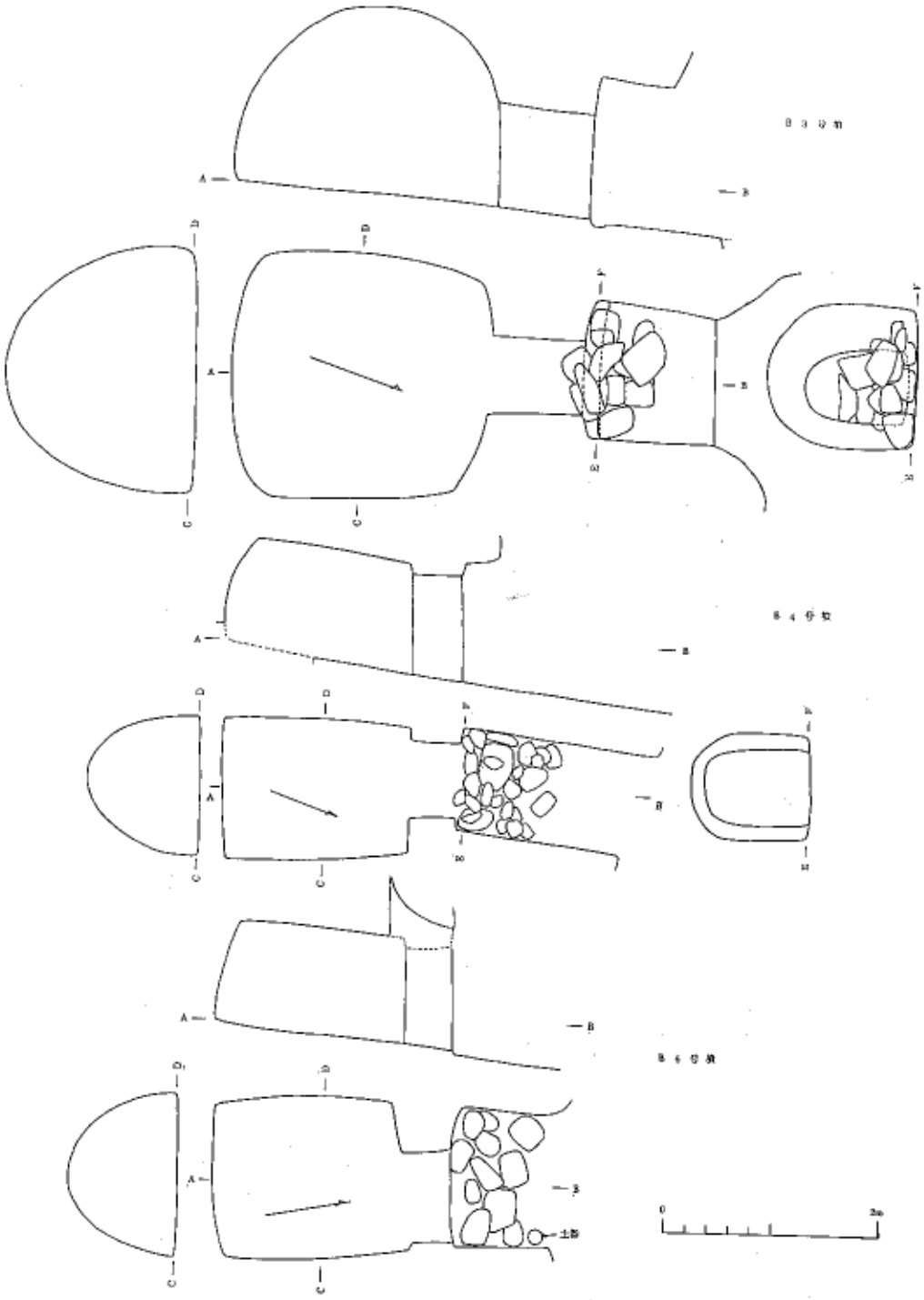
第1図　横　穴　配　置　図



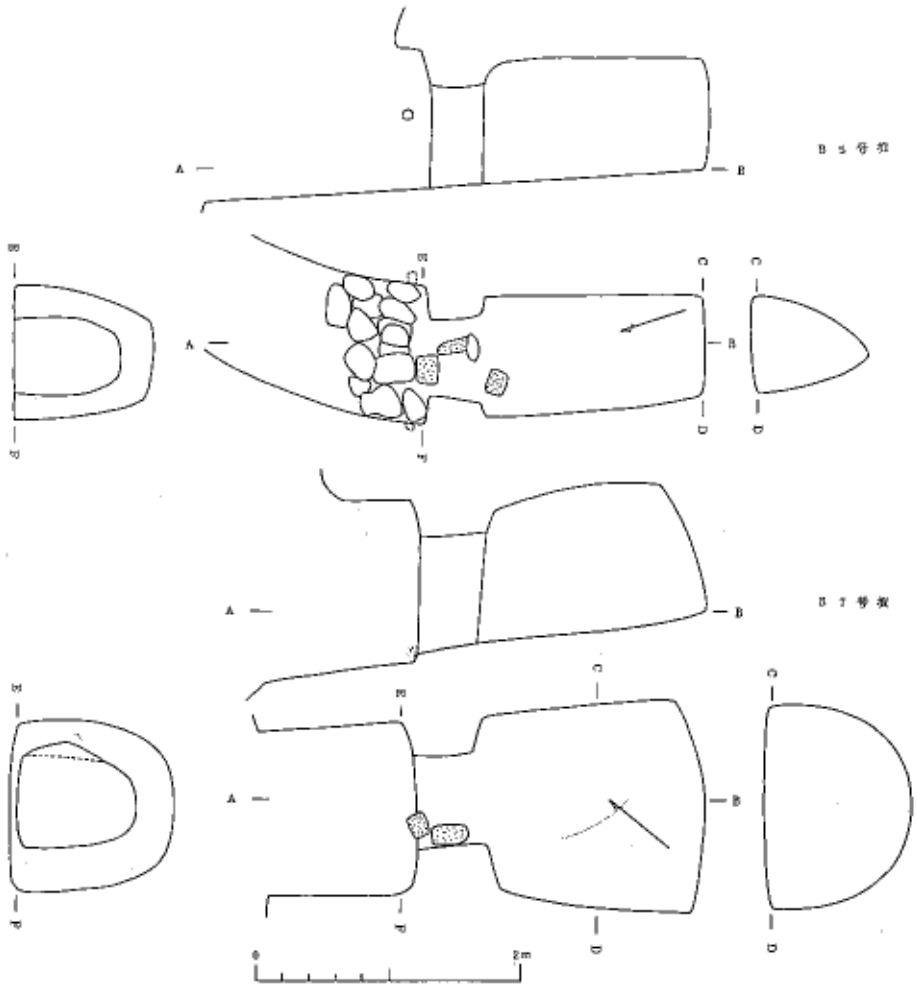
第2図　横　穴　実　測　図



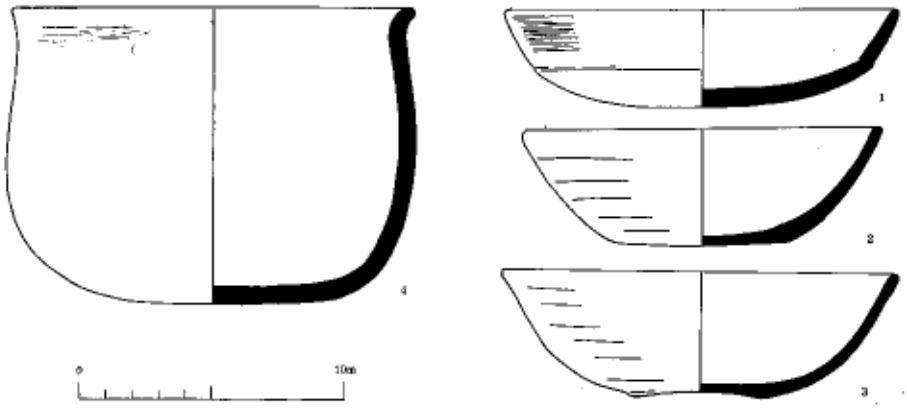
第3図　横　穴　実　測　図



第4図　横　穴　実　測　図



第5図　横　穴　実　測　図



第6図　出土土師器実測図

Ⅲ　松崎古墳

一、所　在　地　　角田市横倉字松崎三一の一、三

二、調　査　期　日　　自　昭和四十一年三月三十日　　至　昭和四十一年三月三十一日

三、調　査　者　　宮城県教育委員会

四、調査担当者　　日本考古学協会員　　志　間　恭　治

五、調　査　概　要

松崎古墳は、横倉古墳群と総称されるものの中に包括される古墳である。この横倉吉墳群についての位置、概況などに関しては、宮城県文化財調査報告書第一一集『宇ノ崎古墳緊急発掘調査報告書』宮城県教育委員会、昭和四一年六月刊にゆずるが、この松崎古墳は、前記報告書に掲げてある宇ノ崎一号墳の約九〇メートルほど南西の丘陵地にある。昭和四一年一月二四日、たまたま宇ノ崎古墳を探訪した際、地主渡辺辰雄氏が、宇ノ崎のすぐ隣接地の雑木山を切り開き桑園団地造成のため、ブルドーザーを使用して、抜根、整地の作業を実施しているのを目げきしたので立寄つたところ、この地の南端にある松崎古墳は、既に北半は削り取られて低平になつており、きれいな積土の断面をさらけだしており、さらに封土中央部のところには箱式石棺がポッカリと開口し、一部削りとられた石棺の板石が近くに散乱している状態のため、地主に対して古墳調査の必要性をとき、調査の終るまで古墳の現状変更をしないように話合いをなし、三月三〇、三一日の両日発掘調査を実施した。

この古墳は、自然の地山の瘤状の高まりを利用して整地のうえ、盛り土して封土を築いたもので、今までは、裾部は外見からでは定めがたい状態であつたが、積土層の断面がはつきりと現われたために、はじめて直径も正確に知ることができた。その規模は直径一七メートル、高さ四メートルの円墳で、横倉古墳群の中では比較的大型の部類に属するものである。この古墳は、工事によつて北半が失われたことは勿論であるが、墳丘南の裾部も渡辺乙彦宅地のため若干削りとられ、現在では僅かに古墳の原形をとどめるにすぎない状態である。ところで、ここに現われた断面層をみると、泥岩の自然地山の層に、ほとんど水平に白色粘土層、里色土層、褐色土層を数十センチほどの厚さに帯状に交互に積みあげて、丁度、虎斑状の縞模様をなしている。そして、それらを覆うように雑草木の茂る表土がみられ、ここに古墳築造の経過をまざまざとみることができる。(第一図)

また、封土やこの工事によつて動かされた土砂の中からは、円筒埴輪片数点が発見されているが、おそらくは、この古墳をとりかこんで埴輪の樹立があつたものとみなされるわけであるが、墳丘のどの部分に、どんな風に樹立したものかは、この方面の発掘調査にまで手が行きとどきかねたため不明である。なお、葺石などは見当らない。

墳丘中心部に開口している箱式石棺(一号石棺と呼称、第二図)の調査もさることながら、墳丘中央部付近で、墳頂下約数一〇センチほど下に板石が顔をのぞかせている部分があるために、発掘を実施したところ、頭部を東に、S四度Eを示した箱式石棺(二号石棺と呼称、第二図)がみつかつた。勿論、この工事によつて、蓋石や西および北側壁石は飛ばされて、そのおもかげをとどめていないが、幸い東と南側壁石が残つており、底には板石が敷きつめてあり空隙には径二〜三センチの小砂利が充填されてあつた。こうしたことから推定すると、長さ一八〇センチ巾約四〇センチ、高さ三〇センチで、厚さ四〜五センチほどの玄武岩の板石を使用して組合せた箱式石棺といえる。この石棺内に人骨の細片を認めたが、ほかに遺物らしいものは見当らなかつた。しかし、この石棺の南西部の棺外側に土師器坏(第三図)が三枚ほど口縁部を上にし、重なつて出土したが、これらはこの石棺の副葬品とみてよかろう。これらの坏は、直径一四センチほどの大きさで陶車の使用は認められない。赤褐色、あらい砂まじり、吸水性にとむ素焼き土器で、口縁部が外反するものと内変するものがあり、中には内側に軽い稜線のつくものもある。これら土器の特色からみて住社式土師器の仲間に入るものと思われる。

この二号石棺の直下、一メートルのところで一号石棺の蓋石に達する。一号石棺の方位はS五度Wで二号石棺とはほぼ直交する。北端の側石は削り取られて開口して発見されたが、これでは充分な調査ができないため、完全な露出作業を計画したところ、地主側から調査上の制約が出されたため南端にあたる場所の一部覆土をはいで調査することとした。その結果、この石棺は北端の側壁石が一枚取り除かれた程度で、殆んど完形を保つていることが判明した。即ち、二号石棺の現長約二九〇センチ、巾五五センチ、高さ四〇センチで、厚さ数センチから一〇数センチの花崗岩の板石を用いた箱式石棺で、これらを五枚ほどの大きな蓋石で覆つていた。東と西の側壁石には一部小口積に積み上げた箇所がみられたが、大部分は板石を立てならべたもので、これらを底面に敷きならべた板石と、裏づめの石塊とでおさえ安定させてある。南端の側壁石は一板石で組まれてある。多分、北端の側壁石もこのような形をとつたものと思われる。ところで、これらの板石間の空隙を埋め板石を安定させ、あるいは石棺内部と外界と遮断密閉するために、暗黒褐色の田の粘土を利用して、かなり分厚にぬりかためてあつた。また、この二号石棺の側壁石全面と、石棺の天井部にあたる蓋石の部分に鮮かな朱彩が認められた。

ところで、底面には、特別に柴木を炭化して粉末にしたものを固着させ、丁度断面U字状にし、死体を安置すべき中央部を一段と低く窪ませた木炭床が設けられ、その下に直径二センチほどの精選された小砂利を三〜八センチ厚さに敷きつめ、さらに底面に七枚(現在六板)の板石を敷き並べるという他の箱式石棺にはみられないほどの念を入れた作りであつた。

出土遺物は何一つ見当らなかつた。発見当初に地主などが多少ひつかき廻した様子があつたが、石棺内の木炭層などは殆んど損傷されていないことなどから、棺内には幅葬品など全然葬られなかつたものと思われる。たゞ、石棺北部を精査中に、臼歯片が出土したが、これから推して頭部を北にして葬られたものとみられる。

この一号石棺の、直下約一メートルの深部に、約三センチほどの厚さに、木炭層が船底状の断面をなして現われた。ここは、横断面だけの調査であるため、積土中に偶然に木炭屑などが混入してできたものか、あるいは、埋葬施設であつたものかどうか、平面的な広がりを調査できないため、今のところ何ともいえないが、とにかく注目されるべきもので、後日、この古墳残存部に手を加えることがあつた際には、丹念な調査を必要とすべきものであると思われる。

考　　察

1. この古墳が包括されている横倉古墳群とは、吉之内地内にある前方後円墳を含めて大小約五〇基の円墳が群をなし、そのほとんどが丘陵頂部を占地して築造されている。これら古墳群は、最近になつてようやく群集する形態などがはつきりしてきたもので、過去に盗掘されて遺物を出したという例もなく、内部埋葬施設も不明なままのため、昭和四〇年三月に行なつた宇ノ崎古墳の緊急発掘調査によせる期待が大きかつたのであるが、それにもかかわらず、内部施設や遺物も全然発見できなかつた。そのため今までは、古墳の群集形態や、外部からの観察などによつて時代など想定するにすぎなかつた。この松崎古墳の石棺の出現、調査によつて始めて墳丘には埴輪をめぐらしていること。内部主体が箱式石棺であるという事実が判明したため、ここに東北地方における古墳の編年上からみて中期末から後期初頭にかけて築造されたものとはつきりと位置づけることができたわけで、その他ここに群在する古墳についてもある程度の類推が可能となつてきたわけで、この古墳調査の意義は極めて大きいといえる。

2. 一号石棺が封土積土の中に横断面をみせて現われたわけであるが、この出土状態をみると、虎斑状の積土層は石棺に完全にほぼ水平位に密

着しており、石棺周囲の積土層の攪乱は認めがたいところをみると、封土築成ののち、掘り込んで石棺を組合せたという形跡は見当らず、積土を実施しながら石棺を設置したものと考えられた。二号石棺における場合も同様にして造られたものとみたいが、表土近くで地層の変化も乏しいために確認はできなかつた。今まで行つた調査でこのように横断面を露出させた例がないので一例としてあげ、今後の発掘の際に、同様の例の有無について検討を加えてゆきたい。また、石棺が重層的に埋葬されていた発見例もないのは今までの調査が不充分かもしれず、これまでの箱式石棺を包蔵する古墳の発掘調査について再検討を加える必要があるだろうことが考えられる。

3.　一号石棺と二号石棺の埋葬には、かなりの時間的な隔たりを感ずる。即ち、一号石棺のかなり上層しかも直上に埋葬されているばかりでなく、方位も直交するような具合であり、さらには、石棺に使用された板石も花崗岩と玄武岩というふうに材質も違つている点が注目される。勿論、このほかにも、これら石材の産地とか、運搬、当時の採掘技術などにも時間の流れが考えられるかもしれないが、それは今後の研究課題でもあろう。

4.　二号石棺の南西隅から土師器が三枚も重なつて出土したが、この出土状態からみてこの石棺の副葬品であつたことは間違いなく、この種の石棺には、遺物が棺外に葬られるという例が多く、この場合もその例にもれなかつたわけで、しかも、遺物の少いことからみても、遺物の存在価値は貴重なものといえるが、特に東北地方の土師器の編年的研究が進んだ現段階において、それらは時代判定の好資料であり、三個の土師器の特色からみて住社式土師器の仲間に属すると思われる。この土器は、東北地方の古墳時代中期末から後期初頭にかけての時期に盛行した土器とみられるわけであるが、このことは古墳調査の結論とも一致するようである。

5.　一号石棺は、二号石棺より時代がさかのぼるものであることは、前述の諸点から論ずるまでもない。一号石棺の被葬者はかなり丁重な埋葬方法がとられたようで、たとえば、石棺に使われた板石の厚さや、組合せ、それに朱彩をほどこすなど種々の点から指摘できるが、底石の上に小砂利、特に木炭床を作つている点など、今まで発掘した箱式石棺の例には一例も見当らない点をみると、かなり意を用いていることが知られ、ここに箱式石棺の埋葬方法に新例証を提供できたことと喜び、今後の古墳研究の資としたい。

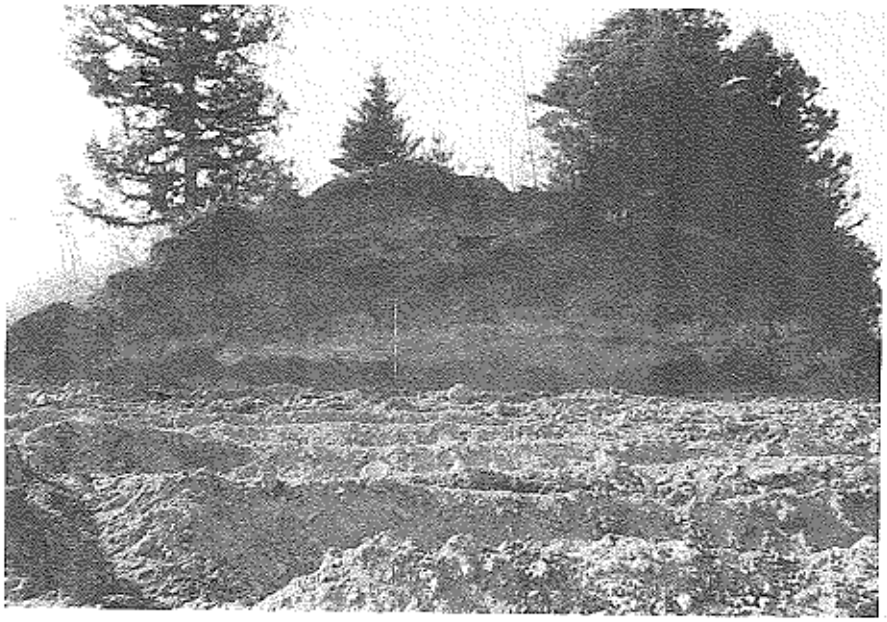
註　右の報告の参考書として

(1)　「宮城県伊具郡丸森町金山台町古墳群調査概報」一・二・三輯　　東北考古学二号

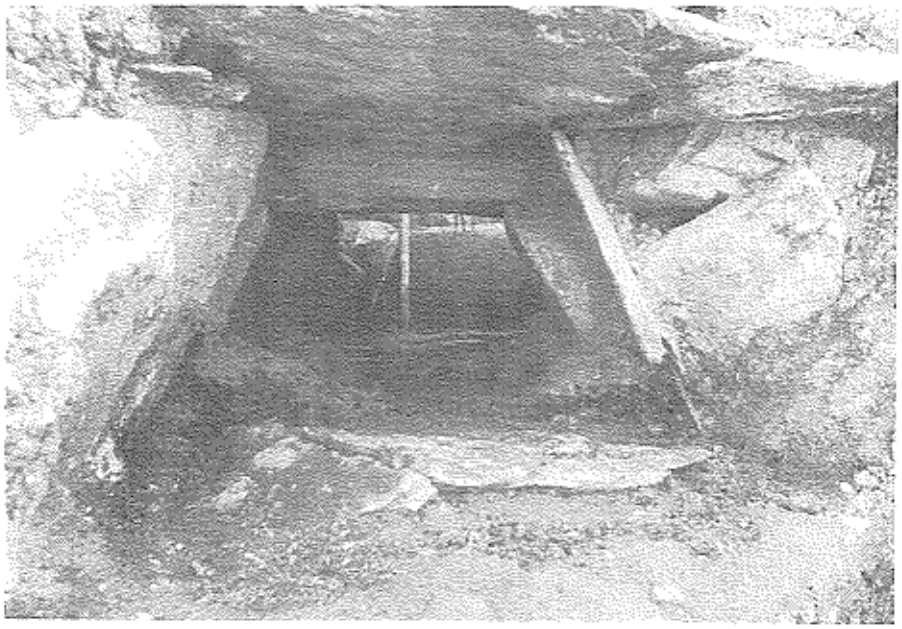
(2)　「角田市鱸沼古墳」　　考古学雑誌四五巻三号

(3)「宮城県角田町住社発見の竪穴住居跡とその考察」　考古学雑誌四三巻四号
(4)「田町裏遺跡調査概報」　宮城県文化財調査報告書第八輯
(5)「宇ノ崎古墳緊急発掘調査報告書」宮城県文化財調査報告書第一一輯

横　倉　丘　陵　（右・大念仏古墳，左・松崎古墳）



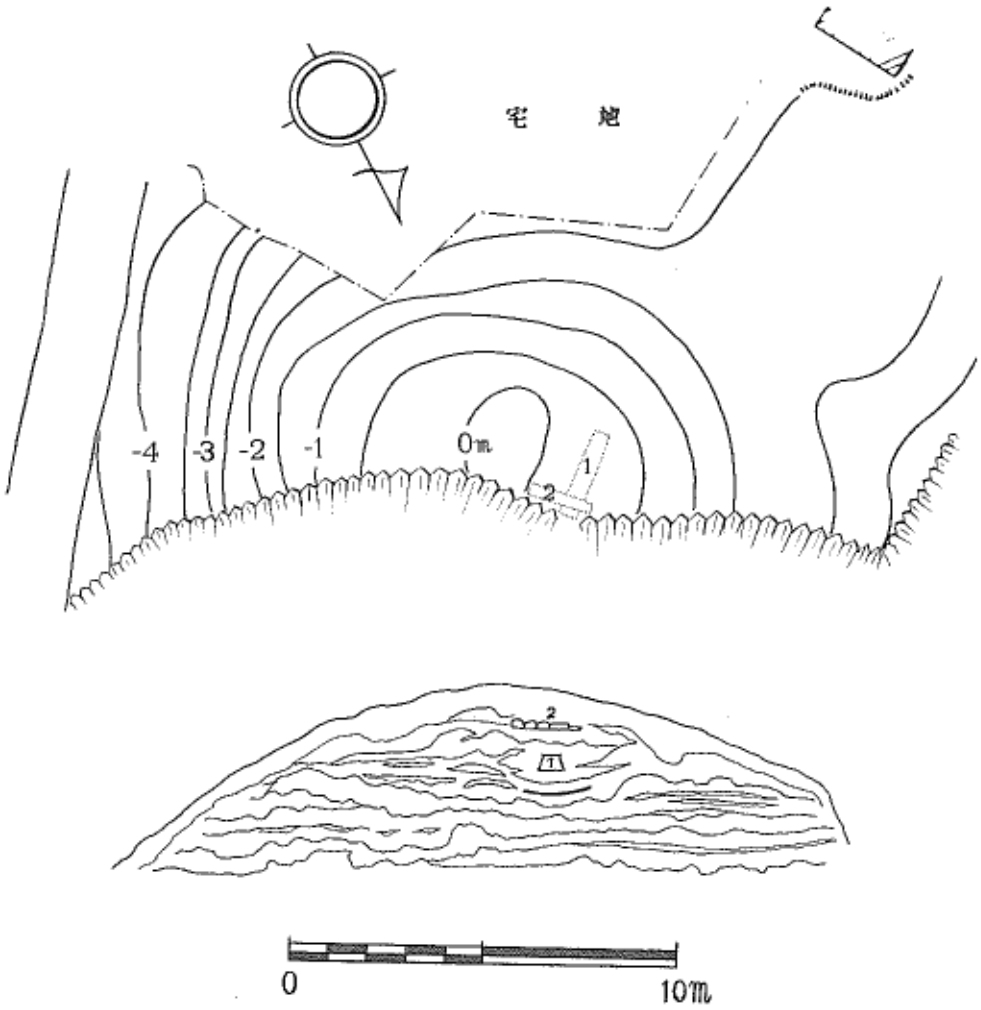
松　崎　古　墳　の　現　状



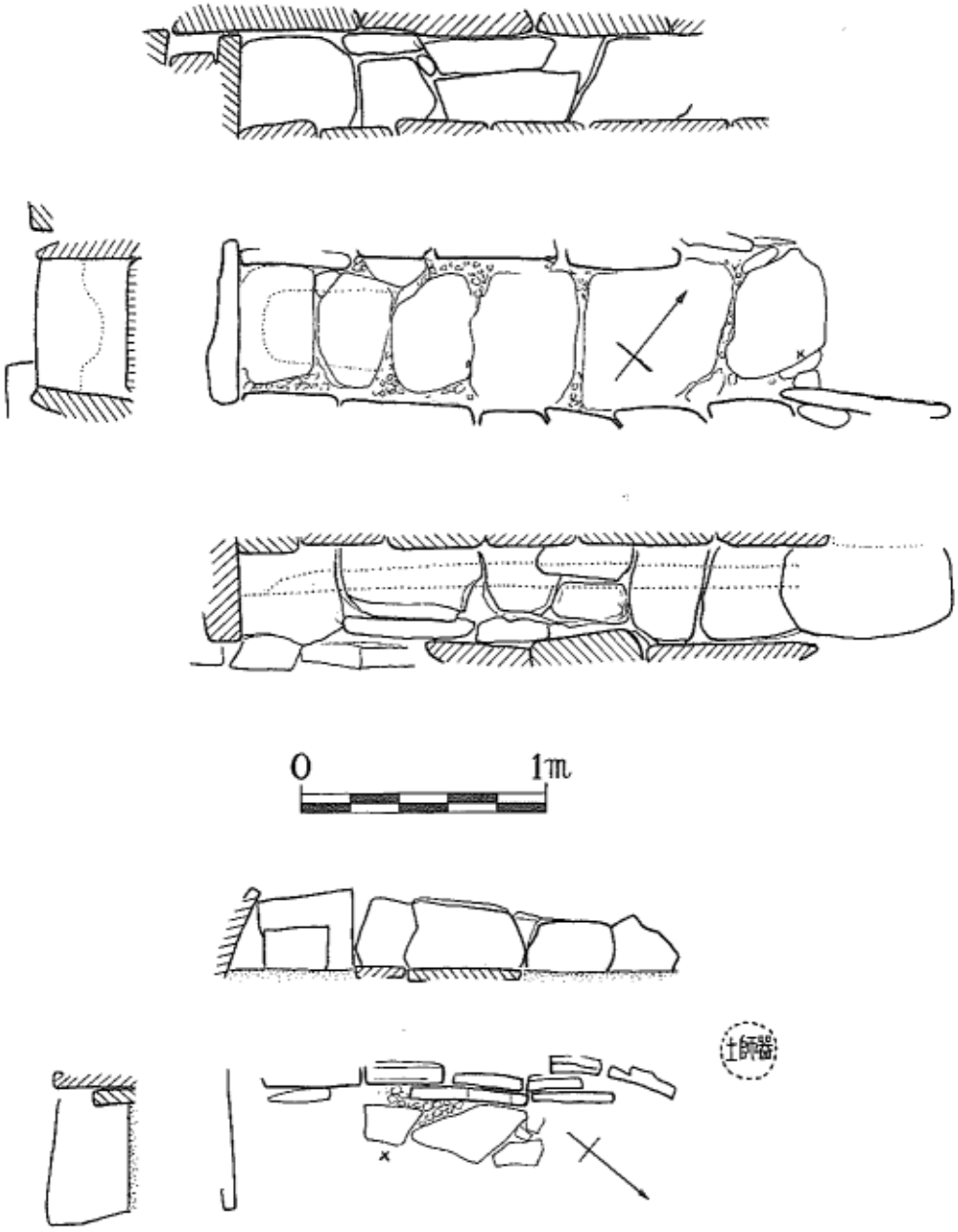
一号箱式石棺を北側より見る

1号箱式石棺南側開蓋状態

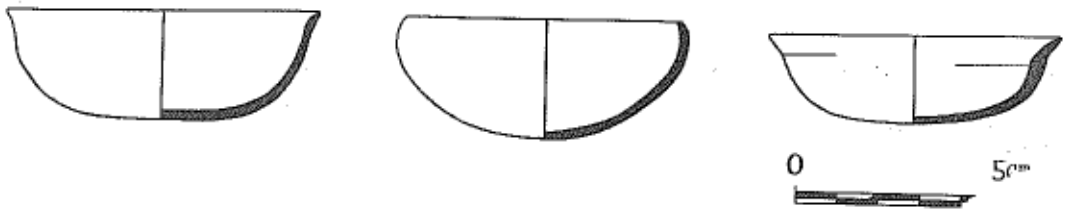
2号箱式石棺左上に見える石は1号箱式石棺蓋石



第1図　松崎古墳地形図および断面図



第２図　　上図 １号箱式石棺実測図　下図 ２号箱式石棺実測図



第3図　2号箱式石棺伴葬の土師器実測図